

# 神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

English pupils taught to use spoken standard  
English in informal as well as formal situations

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-10-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 阿部, 晃直, Abe, Terunao メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/485">https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/485</a>

This work is licensed under a Creative Commons  
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0  
International License.



# 英国の英語教育—くだけた場面でも Standard English ?

阿 部 晃 直

1960年代以降、英国（以下イングランドを指す）の労働党政権下の英語教育では、Standard English（以下SE）も方言も（あるいは他言語でも）、すべての言語変種は等しく価値があり、本質的に正しいと考えられ、子供たちは自分の言語での創造的な自己表現を重んじられた。<sup>1</sup>つまり、訛りや方言を直されることはされなかったのである。このような教育の結果は、言葉づかいや識字力の著しい低下を招き、1988年のNational Curriculum（以下NC）の導入による大規模な改革を待つことになった。

以来、英国では英語教育で方言を許容するか標準語に限定するかをめぐる葛藤がもう20年余りも続いている。しかし、近年SE支持派が圧倒的に優勢になっている。と言うのは、この国の政権が1997年に保守党から労働党に戻ったが、この移行はそれまでの保守党の英語教育政策に根本的な変更をもたらさなかったからである。そればかりではない。新しい労働党政権は、教育におけるSE中心主義を一層進めて来ている。本稿では、こうした英語教育政策のいくつかの具体例とそれを可能にしたと考えられる要因について、SEとNCに関する最近のいくつかの文献を中心に考察してみたい。

まず、NCでSEが実際にどのように表わされているかを見てみよう。Programme of study for Englishという生徒が英語に関して教えらるべき内容規定の中で、キーステージ1という教育段階の生徒を対象にした

Speaking and Listening 領域の Standard English という項は、次のように書かれている。

- (1) Pupils should be introduced to some of the main features of spoken standard English and be taught to use them. (NC, p.17)

この項には、次の (2) のような注意書きが添えられている。

- (2) When teaching **standard English** it is helpful to bear in mind the most common non-standard usages in England (NC, p.17, 強調原著) :
- subject-verb agreements (they was)
  - formation of past tense (have fell, I done)
  - formation of negatives (ain't).

キーステージ 2 およびキーステージ 3 & 4 では、Standard English の項は、それぞれ、次の (3), (4) のように書かれ、その注意書きは、キーステージが上がるにつれて数が 2 つずつ増やされ、キーステージ 3 & 4 では (5) のようになっている。

- (3) Pupils should be taught the grammatical constructions that are characteristic of spoken standard English and to apply this knowledge appropriately in a range of contexts. (NC, p.23)
- (4) Pupils should be taught to use the vocabulary, structures and grammar of spoken standard English fluently and accurately in informal and formal situations. (NC, p.31)
- (5) When teaching **standard English** it is helpful to bear in mind the most common non-standard usages in England (NC, p.32, 強調原著) :
- subject-verb agreements (they was)
  - formation of past tense (have fell, I done)

formation of negatives (ain't)  
formation of adverbs (come quick)  
use of demonstrative pronouns (them books)  
use of pronouns (me and him went)  
use of prepositions (out the door).

NC では、こうして見ると、生徒が学ばべき spoken standard English は、(5)にあるような「non-standard usages を含まないもの」というように、否定的な定義で性格付けられていることがわかる。

一方、Writing 領域では、キーステージ 1 の Standard English の項は、

(6) Pupils should be taught some of the grammatical features of written standard English. (NC, p.21)

とあるだけで、注意書きは付いていない。キーステージ 2 に進むと、Standard English の項は、次のように記されている。

(7) Pupils should be taught:

- a how written standard English varies in degrees of formality [for example, differences between a letter to a friend about a school trip and a report for display]
- b some of the differences between standard and non-standard English usage, including subject-verb agreements and use of prepositions. (NC, p.29)

さらに、キーステージ 3 & 4 の Standard English の項は、次のようになっている。

(8) Pupils should be taught about the variations in written standard English and how they differ from spoken language, and to distinguish varying degrees of formality, selecting appropriately for a task. (NC, p.38)

ここでは、written standard English を構成するものとして、上の（５）の消極的な定義がそのまま使われているのを見てとれる。換言すれば、spoken standard English や written standard English は、non-standard English と対立するものとして捉えられているだけで、それらの中身あるいは構成要素を明らかにした記述的な定義は与えられていない。

また、General Teaching Requirements というところの Use of language across the curriculum という節に次の（９）のような記述がある。

- （９） Pupils should be taught in all subjects to express themselves correctly and appropriately and to read accurately and with understanding. Since **standard English, spoken and written, is the predominant language in which knowledge and skills are taught and learned**, pupils should be taught to recognize and use standard English. (NC, p.51, 強調筆者)

ここから推測されることは、spoken standard English や written standard English は、いずれも standard English という用語で表され得るということで、逆に言えば、standard English は、ときには包括的にまた時には選択的に（上記２，４）用いられているということである。（９）の規定は、さらに、英国の社会で通常暗黙裡に共有されている下記に示されるような SE の概念の一つの現れと見ていいであろう。

- （10） That variety of English which is usually used in print, and which is normally taught in schools and to non-native speakers learning the language. It is also the variety which is normally spoken by educated people and used in news broadcasts and other similar situations. (Trudgill, 1995, pp.5-6)

上では NC の Speaking and Listening 領域において SE が語彙や文法に関してどのように表されているかを検討した。次に、発音に関してどのよ

うに規定があるか見てみよう。Speaking の項では、キーステージ 1, 2 および 3 & 4 で、それぞれ、次のように述べられている。

- (11) To speak clearly, fluently and confidently to different people, pupils should be taught to...speak with **clear diction** and **appropriate intonation**.... (NC, p.16, 強調筆者)
- (12) To speak with confidence in a range of contexts adapting their speech for a range of purposes and audiences, pupils should be taught to...speak **audibly and clearly**, using spoken standard English in formal contexts.... (NC, p.22, 強調筆者)
- (13) To speak fluently and appropriately in different contexts, adapting their talk for a range of purposes and audiences, including the more formal, pupils should be taught to...**use spoken standard English fluently in different contexts**.... (NC, p.31, 強調筆者)

こうした教育内容は、*Speaking, Listening, Learning: working with children in Key Stages 1 and 2: Handbook* という教師用の資料に載せられた次に示すような NC の発音に関する了解事項に基づいて教えることになっている。

- (14) Accent: Differences in pronunciation characteristic of different regions and social classes. Standard English can be spoken effectively in any accent. (p.35)

しかし、発音に関しては問題がある。Standard English は、どの地方あるいは都会のアクセント(訛り)で話してもいいということには必ずしも現実にはなっていない。発音は、アクセントとイントネーション(音調)とから成るが、方言により、前者については母音や子音の異なった固有の発音の仕方があり、また後者についてもそれぞれ違った独特の特徴を持っている。英国では、こうした母音や子音の発音の仕方やイントネーションの中にロンド

ンの Cockney や Liverpool の Scouse 他における発音のような、社会的に、特に SE の話し手たちから好まれないものがある。そこで、新聞等のニュースでNCの英語教育が取り上げられるたびに、このような方言を話す子供たちの文法や発音の矯正の必要が叫ばれる。例えば、The Independent (18-06-1995) は、“Gotter stop them glottal stops, awight?” という見出しで、当時の教育相、ジリアン・シェパードによる Cockney 訛りの混じった英語の広まりについての懸念を次のように報じている。

Gillian Shephard, the Secretary of State for Education, declared war at last year's Tory party conference on the growth of slang among schoolchildren and particularly on “estuary English,” a bastardised form of Cockney that is spreading across Britain. She said local slang should not be used in polite society and that grunts and slack language were impoverishing children.

t 音の声門化あるいは飲み込みに代表される発音の仕方を彼女は grunts (喉の奥の方から出される声) と呼んでいるが、非難される発音の仕方には他に h 音を落とすことや l 音の w 音への母音化等が含まれる。こうした発音は、SE の使用時に許容すべきでないという考えが政界や実業界あるいは一般社会においてすら主流であるために、上記 (11), (12) における “speak with clear diction and appropriate intonation” や “speak audibly and clearly” のところの解釈が教授上の問題となるのである。

以上、SE が NC という公的文書でどのような意味で使用されているかを概観した。文法だけでなく発音の上でも、教育のある人々の規範が学校を通じて押し広められることを確認した。以下では、政権を交代した労働党政府によりこの SE 中心の施策に一層拍車がかけられることを見るが、まず、literacy (識字力あるいは読み・書き力) の向上で教育の強化を図ろうとする National Literacy Strategy について注目してみよう。

識字力向上のための施策は、1996年に当時の保守党政府がすでに the

National Literacy Project として着手したが、前年、試験的にいくつかの初等学校で daily literacy hour を設けて phonics (単語の読み方) や文法に重点を置いた授業を始めていた。この背景には、*The Independent* (12-09-1997) によると、政府支援の調査でわかったことであるが、国民の5分の1がバスの時間表や料理のレシピが読めず、書類に必要事項を記入できないという事態が存在した。同紙 (15-09-1997) は、また、1996年の11歳児が受けた全国テストで、reading のテストで期待される到達度に達したのは56%に過ぎなかったと報じている。そこで、労働党も政権に着く以前から Literacy Task Force という組織を立ち上げていて、1997年に政権を取ると National Literacy Strategy という教育計画を導入し、英語の識字力水準の引き上げにかかった。この識字力引き上げ政策は、Blair 労働党政権の最優先課題である教育水準向上政策の要として位置付けられ、英語教育の争点はそれまでの教えるべき英語の種類の問題から英語の読み書き能力向上の方法に移った。

これは、しかし、SE 教育の要求が緩和されたということではない。識字力は、この場合、上の(9)で見たように知識や文化の伝達を担うSEの運用力を指すわけであるから、その教育はむしろ強化されることになった。特に spoken standard English の教育が重要視されることになっていくが、その理由と過程を次に見てみよう。

1990年代の初めの NC やそれに続く全国テストまた90年代末の National Literacy Strategy の導入以来2000年代の初めまで、英語教育の重点は読み・書きに置かれて来ていた。この主たる原因は、生徒がその学力を全国テストで測られるのは読み・書きの領域であり、その結果が学校別全国成績一覧表として公表されるために、教師は自ずとこれらの領域の教育に重点を置くことになったからであると言われている。しかるに、NC では、speaking and listening (話すこと・聞くこと) が学習内容の3分の1を占めているという問題があった。



90年代末から speaking and listening への関心は、少なくとも2つの方面から向けられるようになった。一つは、NC におけるこの領域で教える英語の中身の問題であり、もう一つは、学習における speaking and listening の働きの再認識の問題であった。前者の場合は、spoken English grammar とはどのようなものがよく解明されていないために生徒に教えるのに困るというものである。この点を、Qualifications and Curriculum Authority (QCA) は、話し言葉の特徴やそれを教える目的、また教師と生徒の教室でのやり取りの分析をした論文を集めた *New perspectives on spoken English in the classroom: Discussion papers* (2003, p.3)で次のように述べている。

In the decade or so since the English national curriculum was produced, there has been a firm emphasis on raising standards in reading and writing. As a result, many teachers now have clear ideas about ways of teaching literacy and about how to plan for the development of their pupils' reading and writing.

By comparison with work in writing, there seems far less confidence about how to teach or plan for progression in speaking and listening. **What is it that pupils need to know in order to improve as speakers and listeners?** How can opportunities for learning about talk be built into the curriculum? To what extent might the development of spoken language be fostered in subjects other than English? Again in contrast with literacy, it seems hard to find a shared language for describing talk, other than noting the often negative ways in which it doesn't look like writing. (強調筆者)

一方、後者の場合は、speaking and listening (talk とも呼ばれる) をコミュニケーション技能の向上や職業的成功に必要な実利的技能として捉えるのではなく、学習や思考を助長する道具であるという考えが再び行われるようになってきたことである。Cameron (2003, p.65-70) は、NC の原点であ

る Kingman Report (1988, p.43) や伝統的な oracy 教育, それに Jim Cummins の BICS / CALP の区別における talk の学習あるいは思考の道具としての捉え方を紹介し, speaking and listening 指導におけるそうした認識の重要性を指摘している。QCA は, このような思潮を反映して発行した指導の手引 *Teaching speaking and listening in Key stages 1 and 2* (1999, p.3) で以下のように記している。

Children's ability to speak and to listen is fundamental to their language development, learning in school, and to social development. Most children come into school with some ability to hold a conversation, persuade, argue and entertain others. School provides new contexts for talk that demand new and greater oral skills. However, simply providing contexts for talk is not sufficient to ensure development of speaking and listening. As with reading and writing, direct teaching of the skills involved is important. Once learned, these skills can be reinforced in other contexts and practiced throughout the curriculum. For example, when children have been taught about some of the key components of a group discussion (such as pooling ideas, challenging suggestions, developing others' ideas), they can draw on these in other problem-solving activities. In this way, **talk underpins learning and thinking.** (強調筆者)

同様の認識は, また DfES 発行の *Excellence and enjoyment: A strategy for primary schools* という文書 (2003, p.28) にも “The immediate priorities for literacy are...securing the place of speaking and listening both as a key foundation for literacy and also as an essential component of all effective learning.” のように明瞭に書かれている。

次に, このような思潮の中で SE の要求がどのように提示されているか, 英語教育関係の文書とマスコミ報道の両方で見てみよう。この時期に出版された特に speaking and listening 指導に関する手引書類, 例えば, 上出の

QCA (1999), *Teaching speaking and listening in Key stages 1 and 2*, DfES (2003), *Speaking, Listening, Learning (Handbook)*, DfES (2003), *Speaking, Listening, Learning (Teaching Objectives)* に共通して顕著な特徴は、SE とそれが使用されるべきコンテキストの関係が繰り返し出てくることである。例えば、QCA (1999, p.50) では、第4学年の3学期に訪問者に自己紹介、第6学年の2学期にディベート、そして3学期には地元の著名人にインタビューというように、相手や目的を変えることによってSEの使用を要求している。また *Teaching objectives* (p.11) でも、6学年3学期の speaking の目標例として、SE を使用して訪問者にインタビューができることを挙げている。さらに *Handbook* (p.24) には、6学年生の speaking について、“As they move between informal and [formal] Year 6 children should be able to use some of the features of standard English appropriately.” と述べている。英語教育関係の文書を見ると、このように、改まったコンテキストではSEをもっぱら使用すべきという考えが、speaking and listening という領域で、強化・再生されていく過程を観察することができる。一方、発音に関しては、QCA (1999, p.12) や DfES (2003, p.30) の評価の基準のところで、“...it is very important to be clear about what is being assessed. It is not their accent or dialect.... It is...clarity in communicating, including the use of reasons, clear sequences of ideas and standard English.” と述べている。SE の使用が評価の対象となることが指定されていると読み取れよう。

先に90年代末から2000年代の初めにかけて speaking and listening へ向けられた関心の一つに、NC で規定されている教えるべき内容の大きな部分を占める spoken English の中身の解明が未だなされていないという問題があったことを見た。この解決に政府が着手することを Daily Mail (4-1-2002) は、“Youngsters may have to learn how to **talk properly**” と

題して以下のように報じている（強調筆者）。

Children could be given elocution lessons in an attempt to end the long neglect of spoken English by schools.

A team of academics has been commissioned to develop ways of teaching pupils to **speak properly** to match recent progress in their standards of writing.

Children would be encouraged to **eliminate sloppy grammar when speaking**, use a wider vocabulary, and develop **clear diction and appropriate intonation**.

“talk properly”, “speak properly” という表現は、ここでは “eliminate sloppy grammar when speaking” と同義で、要するに、子供たちは学校で SE による話し方を学ぶことになるという記事である。また、発音に関する “clear diction and appropriate intonation” という表現は NC から引かれたもので、先に (11) でその規定に関して見たように、解釈が容易ではない。しかし、一般の理解では、かつての教育相ジリアン・シェパードが嫌悪を示したような訛りは矯正の対象になると考えていいであろう。

ここに言及された2001年の speaking and listening に関する研究の政府委託から程なく、その結果が相次いで QCA から公刊された。2003年には上出の *New perspectives on spoken English in the classroom* という、spoken English 教育の様々な新しい研究を鳥瞰する論文集が、またこれを基盤として2004年には *Introducing the grammar of talk* という spoken Englishの文法特性と授業への応用例を示した手引の小冊子が出されている。特に後者で提示される話し言葉に特有のいくつかの体系的な特性（例えば、now とか so のような話題の変化や締め括りを表す語、直示的表現や主語や動詞の省略など、また like や sort of のようなあいまい表現、possibly や I think のような法表現などの使用に関する規則性）は、生徒の話し言葉の規則性に関する理解を深め、表現力の発達を助長するものと考えられている。

このような特性は、NC で要求される種類の英語であるならば、上でみたように、当然「教育のある話者が示すもの」という制限が付くと思われるが、この点、下の引用に見られるように、QCA の出版物では明記されていない。

**Such forms are standard in so far as they are used standardly by all speakers** even if these same forms do not appear or only very rarely appear in ‘standard’ published grammars of English.

(QCA, 2003, p.8, 強調筆者)

...evidence from multimillion word corpora of spoken English shows that **such forms are standard in so far as they are used by all speakers**, even though (...) these same forms do not appear--or appear only very rarely--in ‘standard’ published grammars of English, and feature equally rarely in many formal uses of writing. (QCA, 2004, p.13, 強調筆者)

しかし、この前者の筆者であり、後者の手引書の企画で中心的な役割を果たした Ronald Carter は、Michael McCarthy との共著書 *Cambridge Grammar of English: A Comprehensive Guide, Spoken and Written English Grammar and Usage* では、下に示すように、問題の制限辞は standard spoken grammar の説明に付けられている。<sup>2</sup>

Spoken transcripts often have frequent occurrences of items and structures considered incorrect according to the norms of standard written English. However, **many such forms are frequently and routinely used by adult, educated native speakers...**

Standard Spoken English grammar will therefore be different from standard written English grammar in many respects **if we consider ‘standard’ to be a description of the recurrent spoken usage of adult native speakers.** What may be considered ‘non-standard’ in writing may well be ‘standard’ in speech. (強調筆者)

2度目の使用では“educated”という語が落とされているが、これは“Standard Spoken Grammar”を説明した連続した文章であるので、2度目も“educated”は言外に示されているものと考えていいであろう。

NCのspeaking and listening領域で教える英語の中身を明らかにしようとするこのような動きの中で、もうひとつ注意を引くことは、上の引用にも明らかのように、教える対象に含める語や表現の選択の基準がそれらの使用頻度にされたことである。つまり、“standard”の基準が、従来の書き言葉に依拠した“correctness”の狭い規範から解かれて、使用頻度という記述的なものに広げられたことである。もっとも、“standard”というこの術語は、使用されるコンテキストによって規範的な意味から記述的な意味の間を動いているようである。さらに、この拡張によって、SEの教育をformal-informalという軸に沿ってSEという単一の変種内で行うことがより容易になった、換言すれば、非SE話者の子供たちはinformalなコンテキストにおいてもSEの使用を要求されることになったということも特筆に値するのではないであろうか。Trudgill (1999, rpt. 2000, p.121)は、この点について次のように述べている。

It is true that, in most English-speaking societies there is a tendency—a social convention perhaps—for Standard English to dominate in relatively formal situations, but there is no necessary connection here, and we are therefore justified in asserting the theoretical independence of the parameter standard--non-standard from the parameter formal--informal.... There are many parts of the world where speakers employ the local dialect for nearly all purposes.... Stylistic switching occurs **within** dialects and not **between** them. (強調原著)

英語社会に見られる言語使用の傾向であれ慣行であれ、SEの覇権が観察されるところである。

SEの教育は、以上見て来たように、労働党政権下で一層強化されること

になった。literacy hours ばかりでなく、新たに打ち出した一連の literacy strategies は、保守党が推進した “back-to-basics” や “raising standards” の政策をさらに徹底して遂行しようとするものであった。こうした英語教育政策を社会的に受容可能にした背景には、Ager (2003, p.148) が指摘しているように、中道と言われる新労働党の政策理念や教育関係者による教育現場の一層の混乱忌避があったであろうことは疑いを入れない。<sup>3</sup> なぜなら、そういったものがなければ、英国の英語教育は冒頭で触れた、6、70年代の旧労働党による相対主義的、複言語主義的なものに返されたであろうし、また現場は達成度を評価する全国テストに対する反対運動で混乱をきたしたであろう。ここでは、しかし、新労働党政権が SE 教育を継続して推進することを可能にした別の社会的背景ないしは土壌があることを述べることにしたい。“back-to-basics” 政策 / 運動は、1988年教育改革法をめぐる騒動の中でも一般市民の支持を得たものだったと言われる (Moran, 2003, p.20) が、そこでは若者の識字力の欠如 (即ち文法の規則の無視) が社会の規則の無視、つまり社会秩序に対する脅威と考えられ、彼らに対する識字教育の必要が訴えられた。Moran は、この非識字と反社会的行為を結び付ける考え方が Blair の時代にも行われていることを Blunkett 元教育相の論文に言及して以下のように指摘している。<sup>4</sup>

...the working class and immigrant communities are constructed as a threat because their poor standards of English not institutionalized poverty, marginalization or unemployment excludes them from participating in the community projects set up to combat crime. Furthermore, Blunkett seems to imply that the crime itself...results from the inability of the new migrants to speak English. (p.22)

これは、言い換えれば、非識字を反社会的行為とする考え方に対する同調を一般市民から得ている、つまり、一般市民も同様の考え方を持っているとい

うことで、識字水準の引き上げを目指す Blair 政権の諸施策は、このような一般社会の考え方に支えられているということである。

新労働党政権が SE 教育を継続して推進することを可能にしているいま一つの社会的背景は、発音や文法が「正しい」英語、つまり、SE を使いこなせることが、言葉づかいが良いあるいは教養がある証しであるという18・9世紀に学校教育を通じて醸成された考えが、好むと好まざるにかかわらず、今日も生きているということである。Honey (1989, p.60) は、全国各地で行われた様々な訛りに対する人々の反応調査の結果に関連して、“One of the most striking findings of all is the extent to which these attitudes of respect for RP, and the readiness to stigmatize certain other accents, are shared by great numbers of the speakers of those stigmatized varieties themselves.” という観察をしている。もっとも嫌われる訛りで話す者でさえ、RP が最高位にあり自らの訛りが最下位にあるという訛りに対する評価の序列を受け入るほどに、訛りの序列化は英国の社会に浸透しているのである。このような背景があるところでは、NC や識字力向上施策の遂行において、たとえそれが非 Standard English の話し手により良い雇用の機会やより広い伝達能力のために非標準訛りや文法の Standard English への矯正を課すことで教育水準の向上を図ろうとするものであっても、それは国民一般の支持は得られると考えられるのではないだろうか。

おわりに、本稿は英国の英語教育における SE の支配的体制の強化過程を概観した。書き言葉ばかりでなく話し言葉においても、SE 使用者の規範が成文化され、授業を通じて意識化され、一般化される制度作りを見た。そして、この施策が政権が代わっても大きな抵抗なく国民に受け入れられていく根底には、当該政権の理念等の他に、SE やその使用者中心の世界観の長い年月をかけた英国社会への浸透があるのではないかと推察される。



## Notes

<sup>1</sup> Standard English という用語は、以下で述べるようにいろいろな意味で用いられることがあるが、本稿では SE というように略記した場合には、(10) に示す通常理解されている意味で用いることにする。なお、引用文中や引用文に関して述べる際には、混乱を避けるために当該引用文におけると同様に表記した。また、本稿で言う英語教育は、公立の初等・中等学校の場合を指す。

<sup>2</sup> この本は、因みに、副タイトルが示すように、書きことばだけでなく話しことばも記述したもので、利用した資料に QCA (2004) のときと同じ CANCODE (Cambridge and Nottingham Corpus of Discourse in English) を含んでいる。

<sup>3</sup> Ager は新労働党の「第三の道」の考えの影響に言及しているが、詳述はしていない。教育政策における保守党政権からの継続については、David Hill (1999) の“Part Four: New Labour’s Educational Ideology” に簡潔にまとめられている。

<sup>4</sup> David Blunkett, “Integration with Diversity: globalization and the renewal of democracy and civil society,” in *Reclaiming Britishness*, ed. P. Griffith and M. Leonard (London: Foreign Policy Centre, 2002).

## References

- Abrams, F. “Gottes stop them glottal stops, awight?” *Independent*, 18 June, 1995.
- Ager, D. *Ideology and Image: Britain and Language*. Clevedon: Multilingual Matters, 2003.
- Blunkett, D. “Integration with Diversity: globalization and the renewal of democracy and civil society.” *Reclaiming Britishness*. Ed. P. Griffith and M. Leonard. London: Foreign Policy Centre, 2002. 23 July 2009 <http://fpc.org.uk/fsblob/42.pdf> .
- Cameron, Debora. “Schooling spoken language: beyond ‘communication’?” *New Perspectives on Spoken English in the Classroom*. QCA. London: QCA, 2003, pp.64-72.
- Carter, R. and McCarthy, M. *The Cambridge Grammar of English*. Cambridge: Cambridge University Press, 2006.
- Clark, L. “Youngsters may have to learn how to talk.” *Daily Mail*, 4 January, 2002.
- DfEE. *The National Curriculum for England: English*. London: EfEE, 1999.
- DfES. *Report of the Committee of Inquiry into the Teaching of the English Language* [the Kingman Report]. London: HMSO, 1988.

- . *Excellence and Enjoyment: A Strategy for Primary Schools*. London: DfES, 2003.
- . *Speaking, Listening, Learning: Working with Children in Key Stages 1 and 2 (Teaching Objectives)*. London: DfES, 2003.
- Hill, D. "Education, Education, Education," or "Business, Business, Business?" *The Third Way ideology of New Labour's educational policy in England and Wales*. 1999. 9 October 2009  
<http://www.leeds.ac.uk/educol/documents/00002208.htm> .
- Honey, J. *Does Accent Matter?* London: Faber and Faber, 1989.
- Moran, Marie. *Bourdieu's Paradox, Blair's Dilemma: The role of the education system in the distribution of linguistic capital*. 2003. 18 March 2009  
<http://www.leeds.ac.uk/educol/documents/00003138.htm> .
- QCA. *Teaching Speaking and Listening in Key Stages 1 and 2*. London: QCA, 1999.
- . *Speaking, Listening, Learning: Working with Children in Key Stages 1 and 2 (Handbook)*. London: QCA, 2003.
- . *New perspectives on spoken English in the classroom: Discussion papers*. London: QCA, 2003.
- . *Introducing the Grammar of Talk*. London: QCA, 2004.
- Trudgill, P. *Sociolinguistics*. Harmondsworth: Penguin, 1995.
- . "Standard English: What it isn't." *Standard English: The Widening Debate*. 1999. Ed. Tony Bex and Richard J. Watts. London: Routledge, 2000, pp.117-128.
- Ward, Lucy. "Literacy drive brings extra lessons for primary teachers." *Independent*, 15 September, 1997.